
自転車に乗ったら

侑妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自転車に乗ったら

【Nコード】

N1369B

【作者名】

侑妃

【あらすじ】

青春です。ハッピーエンド。ラブラブになってくれる予定です。短編なんです。

これは学校の帰りに起きた、ちょっとした幸せです。

はつきり言うと、会いたくなかった。

今私の目の前には、幼馴染の鈴木怜夜すずきれいがいる。
私はこっそり溜息をこぼした。

「しっかし久しぶりだよなー、美咲。」

成り行きで一緒に帰る事になってしまった。明日は『鈴木怜夜ファンクラブ』の皆さんが怖いな。

私達は幼馴染で、小学生の頃はとっても仲がよかった。

中学生になっても、ずっと仲良くしてられるって信じてた。それでも・・・それでも、無理だったんだ。

今隣で自転車をひきながら歩いてるこの男は、中学に入るとすごくモテはじめて。バスケの期待の新人エースで。

ごく普通の私はいつの間にか距離を置くようになっていた。
今じゃ『鈴木くん』だ。

「期待の新人エースが、部活はどうしたの？」

「ん、今日は自主連なんだよ。顧問がいなくてな」

「自主連なら、鈴木くんだって行かなきゃじゃん」

一瞬、自転車のカラカラという音が止まった。でもそれも本当に一瞬の事で、すぐに動いた。

「いや、俺はいつも頑張ってたから大目に見てもらってたんだよ」

「ふうん、なんか用事あったの？」

「まあ、どうでもいい事なんだけどな」

「そう、何？」

「叔父さんが来るからちよつと顔出せって」

「そっか」

周りには人はいない。ここは堤防だ。

すると隣に大きな動きがあった。怜夜が自転車に乗ったんだ。

「乗れよ、後ろ」

顎で自転車の後ろを差しながら言った。

「立て、と？」

「立て、と」

につこり笑って言葉は返された。やっぱり格好良い――。

私は自転車に2人乗りさせてもらった。そして、怜夜は走り出した。

心地よい風が、頬を触っていく。

ふと、がっしりとした肩にかけられた自分の手をみた。ああ、そういえば、小学生の頃もやったな、2人乗り。

そっか、やっぱり、やっぱり私は――

「美咲、俺さお前の事好きだよ」

夕焼けに伸びた2人乗りの影は、また見れるだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1369b/>

自転車に乗ったら

2010年12月18日15時05分発行